

ビバハウス便り NO.72 若者たちはどのようにして、心の開放を実現していくのか？ ～両親への信頼の回復との関わりで～ ビバハウス責任者 安達俊子

実りの秋が来たが、どうも今年はいつもの秋とは少し違うようだ。いつまでたっても例年のような紅葉が見られない。その代わりかどうかは良く分からないが、今年の「落葉きのこ」と栗の実だけは、いつ山に入っても持ち帰れないほどの大収穫だ。

自然の秋の実りはいささか心もとないが、若者たちの成長と収穫の実りだけはずっしりとした手ごたえを感じさせてくれる。8月9日始業式の「合宿型・基金訓練自立支援プログラム」（有限会社青少年自立支援センタービバ主催）は、森康彦主任指導員（副施設長）のもとで2ヵ月半を大過なく推移した。この中の一人大阪出身の T 君が、締め切り最終日になって、突然正規訓練外の自由選択の北星余市高校を会場としてのホーム・ヘルパー2級講習の申し込みをしてきたので、全く予想も出来なかったことなのでびっくりした。森さんの説明によれば、本人の言葉として、「両親も年を取っていて、ふたりとも心臓などに病気があるので、いつか面倒を見るとときに役立つと思うので」との理由だった。

なぜびっくりしたかと言うと、彼とビバハウスとの関りは、足掛け約8年ほどに及び、これまでに受け入れた若者のうちでも西の横綱級だったからだ。初めてのロングホームルームを開いたのも彼のためだったし、（ビバハウス便り NO.17）、その前にも、その後も毎回ビバハウスでは初めての問題を限りなく起こしてくれた。ただし努力家の彼は、28歳で北星余市高3学年に編入学し、首の皮一枚を残してであったが、（当時の生活指導部長であった義家弘介氏の後日談）無事卒業した。

卒業はしたが、簡単には正規な職にはつけない、実家で家族と同居するのも困難ということで、2年ほど日高の牧場に住み込み、その後道南の七飯町の農場にお願いし、ほかの利用者には迷惑をかけないように、ひとりだけ工場の2階に住んで、ひとりだけで食事もし、様々な農作業をしてきた。その彼を「基金訓練」開始日に併せ、ビバに再び呼び戻し、訓練生の生活をスタートさせた。農場でひとりぼっちの農作業の繰り返しだけでは、彼を社会的に自立させることは困難だと家族とビバの共通の認識によるものだった。

始業式で、訓練生全員が、これからの決意を述べたが、彼は、「高校中退後、家を出され、いろいろの所でしんどい目に会って来た。これからはひとり立ちを目指して頑張りたい」と述べた。彼の口から、みんなの前で、もろに「家を出された」と聞かされたのは、初めてだったので、彼の心の奥底に沈む想いの重さを知らされた。当初から、1ヶ月たったところで、継続するかを農場主と改めて相談することになっていたのに、病身をおして、高齢の両親が彼のために大阪から飛んで来てくれて七飯町に向かった。本人ともども訓練の継続をこれまでお世話になってきた農場主に訴え、最後には本人が涙をこらえながら、ぜひとも認めてほしいとお願いした。当初、まともに働ける利用者は彼一人しかいないので、抜けられては困ると強く言っていた農場主も、本人が本当にそうしたいなら認めざるを得ないということになった。話が決まり、両親は彼の部屋の全ての荷物を車に詰め込み、掃除機までかけてくれた。『家を出されたが、両親は自分を捨てたのではなかったのだ！』